

高校生・青年期の若者が 学習支援によって得るもの

堀 直予

はじめに

私は県立学校の教員ですが、現在は教員を続けながら、不登校やひきこもりの若者が集う居場所「川の会」の運営、若者の自立を支援する「NPO法人リネーブル・若者セーフティネット」、ひきこもりの人とその家族を支援する「NPO法人ぶらっとほーむ」の他、いくつかの親の会やそのネットワークの運営に関わっています。

20年ほど前、私はたまたま転勤で定時制高校に勤めることになり、そこで不登校を経験したりしていたりする高校生たちと長年つきあってきました。転勤してすぐの時期から親の会にも関わるようになり、そこでは学校で見られない子どもたちの姿や家族の歴史をたくさん教えていただきました。学校と親の会、この二つの場所で教えられたことは、私の教師としての子どもを見る目を非常に豊かにしてくれるものでした。

たとえば、学校にいつも遅刻してくるAさん、何度も指導部の指導にひっかかり、家出して警察に保護されるなどということもありました。彼女のお父さんが親の会に参加して毎回語ってくださる家族の歴史は、とても深く、教員が何か親の養育について意見できるようなものではなく、ましてAさん本人

のことも「何も考えていない」とか「自分勝手」などと断じることはできないと気づかせてくれるものでした。また、Bさんは高校に入ってから順調に通っているように見えたが、親の会でお母さんが語ってくれる家での姿は、泣いたり暴れたり不安でうずくまったりと、毎日が嵐のようだということがわかりました。

そんな彼らが学校に通って学習をする、そのことにどんな意味を持たせるべきなのだろうかと、自問自答する日々でした。受験のためではない、ならば何を学ぶのか、そもそも学びとはなんなのか、もちろん理科教師としてそれなりの信念はあったのですが、人生の苦しみの中にいる彼らに、いったいどんな学びを提供できるのだろうか、彼らの学校生活の何を支えるのがよいのだろうか、などと、あれこれ悩んでいました。

数年したころ、学校に「若者サポートステーション」の方が来訪されました。担任として就職指導に悩んでいた私は、若者の就労支援をしているという話に惹かれ、詳しくお話を伺って、社会には不器用な若者たちを助けてくれる場所があるのだということに希望の光を見出しました。そのときの出会いが、ともに「市民団体 川の会」「NPO法人リネーブル・若者セーフティネット」を立ち上げることにつながりました。ご縁というのはありがたいものです。

定時制高校や通信制高校につながった若者たちの多くは、学校の指導のもとに次の進路へ向かいますが、その波に乗ることができない若者もたくさんいます。例えば、中途退学した後、就労することもなく社会に所属する場所を失った者、卒業したものの進路先を決めきれずに自宅にひきこもってしまった者、一度は所属した進路先を去ることになり所属先を失った者。彼らの行く末をいったい誰が支えてくれるのでしょうか。もちろんご家族がしっかりと支えてくださるところもあるのですが、私が気になっていたのは、家族の支えが非常に弱かったり、家族の中に既に複数の問題があったりする若者たちでした。彼らのために、当時も今も様々な支援が用意されているのですが、それらにたどり着くには、相談窓口に出向いて自分の状態を説明するなど、自ら手を伸ばさなければならない仕組みになっていて、力の乏しい若者には難しいものだとな

かっていました。実際、退学や卒業のタイミングで支援機関につなごうとすると、本人や家族に伝えるだけではつながらず、同行支援が不可欠だということは、支援にあたったことのある方なら誰でもわかっていることでしょう。私はそこを支えていきたいと思い、出会った仲間とともに居場所を立ち上げました。

その居場所「川の会」は、不登校やひきこもりの若者が安心して集うことのできる場所となりましたが、そこには、ある程度エネルギーがたまっていて次に進めそうな若者と、ようやく人とつながり始めてゆっくりじっくり人と慣れていくことからという若者とが混在していました。前者の方に焦点を合わせて活動すれば後者の方は参加しにくくなり、後者の方に焦点を合わせると前者の方の歩みを阻害しかねない、こんなジレンマに陥った私たちは、若者の自立を具体的に支えていくための「NPOリネーブル・若者セーフティネット」を別に立ち上げることにしました。

ここにご紹介するのは、このような私の来歴の中で出会った若者たちの、学びの姿です。

1 若者たちのチャレンジ

「ひとりじゃできなかったことができた。今まではひとりでモノづくりすることが多かったけれど、これは私だけで完結しない。」

「みんなでやっているから、気軽に質問ができた。」

「また、みんなで何か作りたい」

これらの言葉は、愛知県安城市にあるNPO法人リネーブル・若者セーフティネット（以下、リネーブル）に集う若者たちが語ったものです。リネーブルは、若者の自立支援を行うNPOで、三河地方の中小のモノづくり企業と連携しながら、若者たちの自立に向けた学びと経験の場を作っています。代表の荒川さんを中心に、スタッフたちがそのときどきの若者たちの状況に柔軟に合わせながら、「今の自分にちょうどいいはたらき方」をともに探しています。



リネーブル座談会

部、ロボット開発チームに分かれて、それぞれの学びの中で生まれた作品を出展するとともに、すべてのチームが関わって共同で制作した「動いて、おしゃべりできるロボット」の実演を行いました。

これらのものを創るために、若者たちはさまざまなことを学んできました。学ぶというのはある部分では個人の営みであり、そこで身に付けるスキルはその個人のものとなります。しかしそこに仲間がいることで、苦手なことにも挑戦してみる意欲が出たり、仲間の姿を真似することで壁を超えることができました。安心できる環境でわからないことを聞いたり教わったりすることができま

す。メッセナゴヤ2023に出展するまでの彼らのとりくみは、その学びの積み重ねに加え、それをチームの中で生かし、自分にできることを見つけ、頼り、相談し、協力し、チャレンジするというものでした。

学校でも学習支援でも、世間にそのとりくみを紹介するときに必ず問われるのが「社会に出たときに役に立つかどうか」という視点です。困難を抱えた子ども・若者がゆっくりと自分の歩みを進めているときに、「社会」「役に立つ」というワードは遠く、現実の厳しさを突きつけるものです。では彼らが「学ぶ」ときに、何が社会との接続に必要なのでしょうか。その答えのひとつを、リネーブルの若者たちは示してくれていると思うのです。

上の言葉は、そのとりくみから生まれたチャレンジのひとつとして、「異業種交流展示会「メッセナゴヤ2023」」に、彼らの作品を出展したときのことを振り返った座談会の中でのものです。

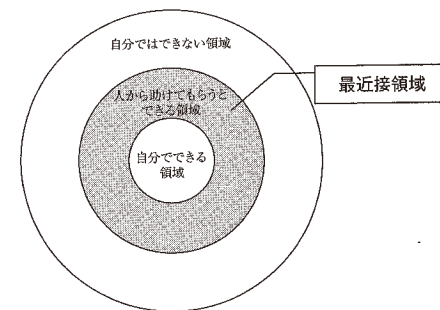
リネーブルの若者たちは、それぞれ3DCAD業務チーム、Webアプリ開発チーム、クリエイティ

2 定時制・通信制にたどりつく子どもたちの学習

不登校の子どもたちの多くは、中学2年生以降の学習が抜けています。これは、この年から不登校が激増することと関係していますが、英語や数学などが急に難しくなることも関係しているように思います。しかし、抜けているのはそこだけではなく、だいたい小4あたりからわからなくなっていることが多いようです。この時期には、抽象的な概念を操作する学習が増え、他者とのコミュニケーションによって概念を形成していく大切な学びが多くあります。その時期に、何らかの要因で学習に取り組めなかったりするのだらうと推察できます。

彼らが定時制高校に入学しても、すぐに学習に前向きになれるわけではありません。心に深い傷やわだかまりを抱えているとき、学習というのは彼らから最も遠いところにあります。そこから徐々に、場に馴染んだり、人に馴染んだりしながら「学校の勉強」にとりくんでいきます。授業でアンケートをとると、ほとんどの生徒が「あてないでほしい」にマルをつけてきます。思春期後半という年齢を考えても当然の反応ではありますが、個別に話を聴いてみると、間違えることへの恐怖が非常に強いことがわかります。間違えたときに笑われた経験があるとか、できないことを責められたとか、なんらかの傷つき体験が背景にあるのです。そんなときは、小さな成功体験を積み重ねることが大事になるので、個別指導の中でちょっとずつ、「やってみたらできた」を繰り返していきます。

こんなときに思い出すのが、ロシアの心理学者ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」という考え方です。人の学びというのは、自分ではできない領域と、自分で



きる領域があり、その間の「人から助けてもらおうとできる領域」にアプローチすることで発達を促す、というふうに考えます。この領域へのアプローチには、「助ける人」が必要です。その役割を果たせるのが教師であり、支援者です。大事なことは、その領域がどこにあるのかを見つけることです。そのためには、対象となる子どもや若者の見るものを一緒に見たり、不安に寄り添ったりして、ともに生きてみる時間が不可欠です。定時制通信制教育や学習支援、自立支援に「居場所」の機能の必要性が語られるのは、この「寄り添い支援」が学習にも絶対に必要だということが実践的に明らかだからでしょう。安心・安全な環境で、少し頑張るとできることをみつけ、それにチャレンジし、できたことを一緒に喜んでもらい、エンパワメントされる経験が、子どもたちを学習支援に惹きつけるのです。

このことは、学習支援のプロセスの中で、本人の内面に変化が起こっていくことの重要性を示しています。子ども・若者の「やってみたらできた!」という体験を意図的に創り出し、次につなげる意欲や勇気、未来への希望を育むことが、学習支援における個別支援の重要な役割です。

3 人生をとりもどす営み

彼らの傷つき体験はさまざまですが、学齢期における傷つき体験はそのまま、「学習に取り組めない」という状況を生み出します。とくに、深刻ないじめや虐待は、学習どころではない状況に子どもを追い込みます。そんな経験をしたある二人の若者の言葉を紹介します。

Cさんは幼少期から虐待を受けていて、大人になって親元を離れるまで、落ち着いた環境で学ぶことができませんでした。親から離れて自分の暮らしを立て直し、様々な人から支えられてようやく生きることがうれしいと思えたころ、彼がやりたいと思ったのは「小学校から学びなおすこと」でした。そしてある学習支援につながり、そこで学び始めたところ、小学3年生の学びがすっぽりと抜けていることに気づきました。彼はぽつりと「あのころ、一番家がひ

どかった」と言いました。そして「ここで勉強したい、あのころできなかった勉強をして、時間をとりもどしたい。」と力強く言いました。彼にとって学びなおしは、その時間を「生きなおすこと」だったのです。

Dさんは、小学校のころから深刻ないじめにあっており、とくに中学校は精神症状もあって、十分に学ぶことができませんでした。彼も大人になってある学習支援につながることができました。決して落ち着いた暮らしではありましたが、学習支援での先生たちとの会話を楽しみに、仕事を持ちながらも通い続け、中学校でできなかった学習に一生懸命とりくみました。能力はあるので、先生たちも驚くほど伸びました。その彼は、「できるようになることもだけど、ここで先生たちに質問できることがうれしい」と言いました。人との関わりが持てなかった中学時代、わからないことがあっても、それを聞ける人はいませんでした。学習支援では、先生たちがいます。人間不信の塊になっていた彼が、「他者と共に生きなおす」大切な時間となりました。

このように、学習支援は、学習を支援するだけにとどまらず、生きることを自を支えるものとなり得ます。中には文字通り、食事によって生きることを支える支援もありますし、CさんやDさんのように、精神面で息を吹き返すような支援も行われます。学ぶとは、さまざまな意味を持っているのだと気づかされます。

4 学習支援を通して彼らが身に付けるもの

定時制高校や通信制高校はもちろんのこと、学習支援では、基礎学力の学びなおしが行われます。読み書き、算数、社会で使う語彙などです。これらを使えるようになると、社会で恥ずかしい思いをするというリスクを減らすことができます。支援につながりにくい家庭にときどきあるのが、「親が書類を書くのを嫌がる」という理由です。住所などを上手に書けない、書類が読めない、その背景はさまざまですが、そのことを「恥ずかしい」と思って社会資源に頼みながら人というのは、結構いるものです。大人にも子どもにも、社会資源

とつながるための最低限の基礎学力を身に付けておけるとよいのだらうと思います。家を契約するとき、車を購入するとき、福祉を利用するとき、できれば自分の力で必要な書類を読めたりしたほうがよいのです。

また、当然のことながら、できないこともたくさんあるので、誰かから助けてもらうスキルも必要です。学びなおしの過程では必ずわからないことが出てきますから、そこで教えてもらうという経験を積むことができます。教えてもらうためには、SOSを出せることと、SOSを受け取られることの両方が必要です。この関係性を育むことは、社会をサバイバルする上での必須項目と言ってもいいでしょう。

このときに、スタッフの態度は非常に重要です。わからない、教えて、と言われたとき「なんでわからないの」は禁句です。わからないことを責められない、わからないことを馬鹿にされない、という「安全」は、学習支援の絶対条件です。とはいえ、多くの場合、支援者は「わかっている人」だから学習支援の支援者足り得るので、思ってもみない質問に出会って、一瞬『え？そんなことも知らないの？』と思ってしまう経験は一度や二度ではないはずです。私自身、「げんこ」と言われて「？？」となっていたら「原子」のことだったときなど、うっかり「そんなこと……」と言いそうになって、ぐっと言葉を飲み込んだものです。しかも彼らはそういう大人の態度に敏感ですから、その一瞬を見逃さず、彼らからの信頼を失墜してしまうこともあります。そういったやりとりを乗り越え、質問しても大丈夫、わからないといっても大丈夫、となると、“教える側から教えられる側に向けて伝える”のではなく、“学びの主体と教える側とがともに学びの内容を見つめる”ようになります。彼らが主人公となって、学び始めるのです。

さらに大切なこととして、ともに学ぶ仲間との出会いがあります。ときには「助けてくれる人」が級友や仲間であることもあります。ここで“助け、助けられる”という関係が生まれることもあり、若者たちは、人によって傷つけられたという過去の経験の上に、他者とともに生きるという新しい経験を上書きしていきます。助けてくれる人は支援者ばかりではなく、仲間も、これから出

会う誰かもいる、という心理的な拠り所がたくさん作られていきます。

そんなふうにして、安心・安全が保たれたところで学びながら小さな成功体験を積み重ねると、過去にあきらめていた夢がまたふくらんでくることがあります。できないと思っていたけれど、努力したらできるのかもしれない、仲間と一緒にならできるかもしれない、と、経験に根差した希望が芽生えます。次はこれをやってみたい、いつかこれをやりたい、と、主体的に動き出すのです。

5 自分が主人公の人生を生きる

リネーブルの話に戻ります。彼らは紆余曲折を経て、リネーブルという学びの場にたどり着きました。彼らが学んだのは、プログラミングやCADや動画編集のスキルだけではありません。チームの中で自分が役割をもつこと、仲間と助け合えるということ、失敗しても乗り越えられるということ、そのような「他者との関係」の結び方も学んだことのひとつです。メッセナゴヤ2023の当日には、おしゃべりロボットの制作には関わらなかったEさんも参加していました。彼は、チームのみんなが制作をしているとき、それを横で見えて、リハーサルなどでは質問をする役を買って出ていました。だからEさんは、展示を見に来た方に概要を説明することができ、詳しいことは誰に話してもらえばいいかがわかっていて、お客さんとチームをつなぐ重要な役目を担いました。また、ロボットのデザイン画を担当したFさんは、「3DCADも前に少しだけ学んだりしていたから、デザインのときに、作りやすいようにということも考えることができた」と言っていました。EさんもFさんも、自分自身が学びの主体となっており、誰かと比べるのではなく、誰かと競うのでもなく、自らの力を発揮して、学んだことを生かしていました。

私たちが学習支援をなぜ行っているか、それは、リネーブルの若者たちのように、自分の人生の主人公となって生きようとする人を支えたいからだだと思います。さまざまな事情の中で、力を失いかけてたり、自分の意思を見失ったりしている子どもや若者たちを見て、「あなたの人生を生きようよ」と呼び掛けた

くなるのです。そして自分の人生の主人公であるとは、自分の発したものを受け取ってくれて、自分に向かってなにかを発してくれる他者と共に居てこそ、実現するものなのです。

6 高校生、青年期の学びの支援の深化を

高校生、青年期の学びの支援は、その先の人生を彼らが生きていくための土台作りであり、ずっと年上の大人から無条件に支援をしてもらう、という最後のチャンスともなります。そこで期待されるのは、彼らが社会に出たときに必要なスキルを身に付けていけることです。社会に出るときに必要なスキル、それは、個別には基礎学力であり、そして他の人と関われる力です。このスキルを使うのは主人公たる本人であって、支援者でも親でもありません。高校生世代・青年期にはそこが徹底して必要で、支援者のスキルとしては「待つ」ことがとても重要になります。

また同時に、自分より年下の子どもたちのモデルとなり、支援する立場ともなり得るし、若者だということから高齢者から頼りにされ得る存在でもあります。出番のある居場所で、自分を否定されることなく、未来に向けて学びなおしができることが理想です。

愛知県は、「若者・外国人未来応援事業」という事業を民間団体に委託して実施しています。筆者の運営するNPO法人ぶらっとは一むもそのひとつです。対象はおおむね中学卒業後から39歳程度までと広く、高校への入り直しや高卒認定試験の受験、資格取得のための勉強、そして日本語の学習などの支援を行っています。ある程度の年齢ですから、自分の意志で通ったりやめたりすることが自由にできます。それでもそこに次々と若者たちが集まってくるのは、学びたい思いや学んだことを生かせる自分になりたいという、自分への期待がどこかにあるからなのでしょう。16歳以上であれば働くこともできます。自分の力でお金を稼いで自立していく、ということも視野に入れた支援が必要で、ハローワークや障害福祉サービス等との連携が不可欠です。しかし、できない

ことも苦手なこともたくさんあって、自信がなく、不安でいっぱいとき、自立という言葉は夢物語のように聞こえるようで、通っている若者たちの心は大きく揺れることが珍しくありません。そのときに助けになるのはともにがんばる仲間です。

私たちの運営する「未来塾」では、学びの支援と同時に居場所の提供も行っており、先生たちとゆっくり話したり、仲間とおしゃべりしたりする時間も大切にします。不安に揺れ動く若者たちが、安全・安心を感じながら学びあい、仲間とともに学習などに取り組む経験をして、それぞれのペースで少しずつ自立に向かっていきます。支援者はそこに寄り添い、助けすぎることのないように細心の注意を払って、彼ら自身の力が発揮できるように支えています。個別支援を中心としたこのようなとりくみをベースに、他者と共になにかにとりくむことを支援のメニューとして準備していくことが、若者のエンパワメントには効果的だろうと思います。行政の事業ではまだまだそのような観点のものは少ないのですが、リネーブのようなとりくみをモデルに、若者支援をさらに深化させていけるとよいだろうと考えています。

まとめ

高校生世代、青年期の若者たちは、社会を支える力をもっています。それだけに期待されることも多いのですが、一方ではそれぞれの個人のパワーレスな状況があり、その乖離を感じる本人たちも周囲も焦ったり苛立ったりしてしまいます。「そのまま大丈夫」という言葉はときに「あなたに期待をしていないよ」というメッセージとなってしまう、本人をさらにパワーレスにする恐れがあります。なにがどのようなままで大丈夫なのかということについて、支援者の中で繰り返し自問自答しておくことが必要です。学習支援は、今と未来の両方を支えるものですが、彼らが未来に何を見るのか、何を見られるようにしていくのか、支援側の意図的な仕掛けも重要なポイントとなるでしょう。また、彼らに仲間がいることはとても大事な環境で、仲間との関わりから得られる心

の交流がエンパワメントにつながるように支援することが望ましいと思います。そして個別支援においては、彼ら自身の思いのうち、自分の居る環境がどうなるかという自分の外側についての願いとともに、自分がどうなるかという、どうなりたいか、という内側についての願いを丁寧に聴きとることが大切です。支援者は聴きとったものを丁寧に扱うことで、表現されたその願いが語るに値することだということを言葉と態度で示し、その人をエンパワメントすることができます。その願いにどうアプローチしていくかはその人が決めることであり、支援者は必要な支えがあればそれを提供する準備を行います。受け取るかどうかはやはりその人が決めます。このような支援者の態度がどうしても必要なのは、この世代の若者が近いうちに支援者の手の届かないところで自活していく可能性があるからです。その意味で、この世代への支援は「何をするか」より「何をしないか」をしっかりと検討しておくことが肝要だろうと思います。

私自身は、多くの若者たちやそのご家族、支援者の方たちとの関わりのなかで、多くの失敗を繰り返し、今のような考えに至りました。中には私の不用意な関わりでパワーレスとなってしまった若者もいます。その時をやり直すことはできませんが、そこで学んだことを次に生かすとともに、まだ私に関わってくれるその若者の力を信じて関わり方を変化させ続けています。これをやれば大丈夫という答えのない支援現場ですから、その不確実性に耐える胆力も必要ですが、それを支えてくれるのはやはり仲間です。支援側にも若者と同じように仲間が必要です。互いの持つ力を引き出しあい、聴きあい、支えあう関係を支援者同士につくっておくと、若者たちもそれをモデルとして同じような関係を紡いでいくことができます。心があたたまるとようなそんな場を、学習支援という形を通して地域に広げていけるといいなと思います。